

# 「ケルト的周縁」の民と「野蛮人」

— ウィリアム・オヴ・ニューバラとその影響源を中心に —

有光 秀行

(人文学部人間文化学科)

## People of the Celtic Fringe and the “Barbarians”

ARIMITSU Hideyuki

### 1 はじめに

筆者はかつて、12～13世紀に活躍した聖職者にして著述家のジェラード・オヴ・ウェイルズ (Gerald of Wales、ギラルドゥス・カンブレンシス Giraldus Kambrensis) が、ウェイルズおよびアイルランドといういわゆる「ケルト的周縁」(の一部)にいかなるまなざしを向けていたのかを考察した<sup>(1)</sup>。本稿ではそれに続き、ジェラードのような「野蛮人」視のあり方、またその系譜の一端を別の史料に基づいて検討したい。具体的には、ジェラードの同時代人ウィリアム・オヴ・ニューバラ (William of Newburgh) による「ケルト的周縁」に住む者たちの捉え方をまず考察する。そしてそれがいかにして形作られたのかを、それ以前の年代記との関係において考える。

まずこうした課題の意味について述べておきたい。筆者の念頭にあるのは、近年着目をあびている「ブリティッシュ・ヒストリー」論、すなわちイングランド・ウェイルズ・スコットランド・アイルランドといった枠にとらわれず、「ブリテン諸島」という(あるいはさらに広い)範囲で歴史を考えようという試みである<sup>(2)</sup>。イングランドからの征服・植民活動でブリテン諸島内の人間関係がいろいろな面で緊密度を増していった11世紀以降の数世紀は、今日に至る「ブリテン諸島」内の諸関係の基礎が形づくられた重要な時期とみなすことができ、ある意味で「ブリティッシュ・ヒストリー」の出発点と考えることができよう。このような枠組みの設定は確かに、われわれがこの時代を考える上で有効に働く面を持っている<sup>(3)</sup>。そしてR. R. デイヴィス (Davies) が述べるように、「いかに人が世界をみているか、特に自分自身、およびその他者との関係をどう見ているかは、人が行動するに当たっての本質的な背景を提供する」<sup>(4)</sup> のだから、「ブリテン諸島」という枠組みで同時代人の自己認識・他者認識を考察することは「ブリティッシュ・ヒストリー」の基本問題のひとつといえるだろう。

さてこのテーマはデイヴィス自身、またJ. ギリンガム (Gillingham) によって近年扱われている<sup>(5)</sup>。自己認識・他者認識とひとくちにいってもそれをとらえるにはさまざまな指標があるろうが、イングランド人が「ケルト的辺境」の民を「野蛮人“barbari”」をとらえることは、筆者がかつてジェラードを論じたときに述べたように、現実の征服・支配とも密接な関係を持ちうるものでもあり、重要な着目点のひとつといえる。特にギリンガムは、「ケルト的辺境」の民が「野蛮人」視されるようになった責任(の少なくとも一部)をウィリアム・オヴ・マームズベリ (William of Malmesbury) に帰するという興味深い提案をおこなっている。本稿はその検討もかねて、こうした「野蛮人」視をおこなったことでジェラードと並び有名な人物としてウィリアム・オヴ・ニューバラをとりあげて検討し、さらに彼の「思想的系譜」の一端をたどってみたいと考えている。

## 2 ウィリアム・オヴ・ニューバラと「野蛮人」

本章ではウィリアム・オヴ・ニューバラの *Historia Rerum Anglicarum* (『イングランドの出来事の歴史』)<sup>(6)</sup> をとりあげる。ウィリアムは1135もしくは36年、北イングランドに生まれた。その生涯についてわかることはほとんどない。おそらく少年期からニューバラ修道院に属し、ヨークシャーやダラムの外に出ることはなく、1198年頃亡くなった。HRAはノルマン・コンクエストから1198年までを扱った史書で、ウィリアムの最晩年の著述である<sup>(7)</sup>。

ではウィリアムの作品で「ケルト的周縁」および「野蛮人」についてふれているところをあげてみよう(引用はすべてHRAより)。

[1] 有名な、ジェフリ・オヴ・モンマス (Geoffrey of Monmouth) に対する反論の一部で、ジェフリが虚偽の物語をしていること理由を推測して、「ブリトン人——その大多数は野蛮人であるといわれ、今もアーサーがくるだろうことを期待しているほどだという——の気に入るように “gratia placendi Britonibus, quorum plurimi tam bruti esse feruntur, ut adhuc Arturum tamquam venturum exspectare dicantur” (p.14) といわれている。「ブリトン人 “Britones” と「野蛮人 “bruti” (の大部分)」が同じものとされている。なおここではウォルシュラの英訳に従い “bruti” を「野蛮人」と解釈したが、Ch. T. Lewis and Ch. Short, *A Latin Dictionary*, Oxford, 1879や J. F. Niermeyer, *Mediae Latinitatis Lexicon Minus*, Leiden, 1984は「愚者」としている。

[2] 次もやはりジェフリへの反論の一部で、そのアーサー物語に3人のブリトン人大司教が登場する時代錯誤を指摘している。「じっさいヨーロッパの野蛮な民は、久しくキリストの信仰に改宗していても、司教で満足し、パリウムの特権に気を配ることはなかった。すなわちアイルランド人、ノルウェイ人、デー人、ゴート人(スウェーデン人)は、ずっとキリスト教徒であり司教をもっていたのがわかっているが、われわれの時代になって大司教を持ち始めたのである “Barbarae vero nationes Europae, etiam olim ad fidem Christi conversae, contentae episcopis, de pallii praerogativa non curabant. Denique Hibernienses, Norici, Daci, Gothi, cum olim Christiani fuisse et episcopos habuisse noscantur, nostris temporibus archiepiscopos habere coeperunt.” (p.16)。ここでは「アイルランド人 “Hibernienses”」が「野蛮な民 “barbara natio”」とされている。またスカンディナヴィアの民も同様である<sup>(8)</sup>。アイルランド人についてはp.166にも「(アイルランドには)その習俗が未開で野蛮であり、法や規律をほとんど知らず、耕作をせず、そのためパンより乳で生きている民がいる “sed populos habet moribus incultos et barbaros, legum et disciplinae fere ignaros, in agriculturam desides, et ideo lacte magis quam pane viventes” といわれ、p.168の2ヶ所(リチャド・ド・クレアのアイルランド攻めの記事)、p.238(ジョン・ド・クーシーのアイルランド攻めの記事)でも「野蛮人」とされている。

[3] 1138年の、スコットランド王軍とイングランド軍による「スタンダードの戦い」に至る経緯を述べた中で、「スコットランド人の凶暴さはよみがえり爆発してノーサンブリアを獲得し、そこはたいへん残酷な劫掠によって掠奪し尽くされた…性別も年齢も容赦されず…暴れ回るのに制限を定めず… “Scottorum redivivus furor erumpens Northumbriam crudelissima depopulatione exinanitam obtinuit…neque sexui neque aetati parcens…non quidem ibi debacchandi sibi limitem statuens…” (pp.33f.)とある。スコットランド人を野蛮人と直接に述べているわけではないが、この文のしばらくあとにはヨークの人々が「野蛮さにおいて恐ろしいこの大勢の人々に対して (“contra multitudinem immanitate terribilem”)) 抵抗した<sup>(9)</sup>、と述べられている。またここでは、性別も年齢もかまわず虐殺するという描写に着目しておきたい。

[4] スコットランド王デイヴィッドの事績を描いた一節に、「その(ダヴィデ王の)ように彼(デ

イヴィッド王)も、他の点では良く敬虔であったが、荒々しい野蛮さから血を熱望し、年齢も性別も容赦しない——彼はそれを欲せず禁じようとしたが無駄だった——スコットランド人をイングランド人の地に行かせた“ita et iste alias quidem bonus et pius, Scottorum gentem ex effrenata barbarie sanguinis avidam, et neque aetati neque sexui, licet eo nolente et frustra prohibente, parcuturam, Anglorum immisit provinciae” (p.72)、また「敬虔なことをなすばかりではなく有用な贖罪の実行においても、いにしへのダヴィデ王の王らしい理想を、この新しいデイヴィッド、野蛮な民の野蛮でない王は満たしたのである “Itaque non solum in executione piorum operum, verum etiam in actione fructuosae poenitentiae, regiam antiqui David formam novus iste David, rex non barbarus barbarae gentis, implevit.” (Ibid.)とある。「スコットランド人 “gens Scottorum”」が野蛮である、と明言されている。[3] でみた、性別も年齢も無視して殺戮するという像がここでもあらわれていることにも注目したい<sup>(10)</sup>。p.76の例 (マルコム王が「野蛮で邪悪な民のなかで “in medio nationis barbarae et perversae”」天の星のように輝いたと述べ、また彼の民を「野蛮な民 “gens barbara”」「野蛮人 “barbari”」としている)、p.177 (1173年にウィリアム王が「野蛮で血を渴望する民の大軍とともに “cum gentis barbarae et sitientis sanguinem immanissimis copiis”」イングランドに侵攻したことを述べる)、p.181 (1174年にスコットランド王が「己の民の無数の野蛮人 “propriae gentis infinita barbarie”」およびフランドルからの傭兵隊とともにイングランドに侵攻したことを述べる) p.183 (やはり1174年の記述。「スコットランド人 “Scotti”」を「野蛮人 “barbari”」と述べているのが2ヶ所)、p.184 (同様に1174年の記述でスコットランド王軍を「野蛮人 “barbari”」とする)、pp.186f. (ファーガス・オヴ・ギャロウェイの没後遺児たちの間で争いが起き、「野蛮人 “barbari”」が「野蛮人 “barbari”」に対して暴れた、とする) もやはりスコットランド人を野蛮としているものと考えられる<sup>(11)</sup>。

[5] 1157年に関する記述に、「しかし多くの日が過ぎぬうち、国王(ヘンリ2世)と、不穏で野蛮な民ウェイルズ人の中で不和が生じた “Verum non multis diebus elapsis, inter regem et Walenses, gentem inquietam et barbaram, discordia oritur”」(p.106)とある。ここでは「ウェイルズ人 “Walenses”」が「野蛮な民 “gens barbara”」とはっきり述べられている。さらにp.107ではウェイルズ人は「その本性から習俗が野蛮で、向こう見ずで不誠実、他者の血を希求し自分の血を軽んじ、常に掠奪を望み、自然から憎しみをそそぎ込まれたかのようにイングランド人に敵意を示す “pro sui natura homines moribus barbaros, audaces, et infidos, alieni sanguinis avidos, et proprii prodigos, rapinis semper inhiantes, et tamquam transfuso a natura odio genti Anglorum infestos”」とされ、しかしウェイルズ人が山がちで穀物が少なく、イングランドからの輸入そしてイングランド王の好意・許可に依拠しているため、その権力に服することを余儀なくされると述べられる<sup>(12)</sup>。

[6] 1174年ウィリアム王がイングランド側にとらわれたあとのスコットランドについてのべた中に、「王がとらわれたのを知ると、野蛮人たちは…刀剣を…自分たち自身に向けた “Regis quippe captione comperta, barbari … ferrum…in seipsos verterunt”」(p.186)とある。そして、「イングランド人 “Angli”」が多数スコットランド王の軍に加わりまたスコットランドの城市・都市に住んでいて、「スコットランド人 “Scotti”」は生まれつき持っていたが王を恐れ隠していた彼らへの憎しみをあらわにして、行き会った者たちを容赦なく殺戮した、と述べられている。前述のようにウィリアム・オヴ・ニューバラはたびたび「スコットランド人」を「野蛮人」とし、特にこの1173~1174年の記述についてはそうだったので、ここの“barbari”もそれと同様、と考えることができるかもしれない。一方でここまで見た例では文脈上「スコットランド人」と「野蛮人」が同一であることがわかりやすかったのに対し、ここでは「イングランド人」も野蛮人の中に含まれる

かのようにあり、またこれまで「スコットランド人」と呼ばれてきた人々の中に、「イングランド人」と呼ばれうる者たちが実際にはいたことがはっきり述べられている。“Scotti”と“Angli”を区別する基準がひとつだけではなかったことが推測される(たとえば「どの王に服するか」と「血統もしくは出身地(など深い関わりのあった土地)」)。

以上ウィリアムが「アイルランド人」、「スコットランド人」、「ウェイルズ人」などを、とくに「野蛮人」としてとらえている箇所をあげた。ウィリアムの作品を読んで感じられるのは、こうした人々は話題にのぼるたびにほとんど例外なく「野蛮人」と呼ばれたり、その「野蛮さ」が指摘されることである。彼の精神世界の中ではこのイメージが固定観念化されているといえる。

さて、それではウィリアムのこうしたイメージはいかにして形成されたのであろうか。この問題については前述のギリングムをふくめ2人の研究者が直接あるいは間接に答えを呈示している。それでは章を改めて、彼らの説をみることにしよう。

### 3 「野蛮人」視についての、パートナー、そしてギリングムの説

N. パートナー (Partner) は、12世紀イングランドにおける歴史叙述を検討した著書の第2部を、ウィリアム・オヴ・ニューバラにあてている<sup>(13)</sup>。彼女は、先に見たウィリアムによるジェフリ・オヴ・モンマス批判を、古今のあらゆる「ブリトン人」への軽蔑に由来するものとし、こうした考え方を作り出したのが、ウィリアム自身に大きな影響を与えたベータ (Bede) であると指摘する。そしてノルマン人やアングロ・ノルマン人は一般にウェイルズとブルターニュにおけるブリトン人の末裔をベータからうけついで言い方で語り、「不実で、好戦的だが変わり身も早く、野蛮で疑り深い」というブリトン人表現はすべてのケルト系の民に適用されたようだ、と述べる。ウィリアムがベータを実際念頭においている箇所をあげつつ彼女は、ジェフリの書物がウィリアムの、「ギルダスとベータという権威によって正当化され強化された、民族的な漠然とした反感」に抵触するものだった、という<sup>(14)</sup>。

一方、近年「ケルト的周縁」に住む人々へのイングランド人の姿勢を精力的に研究しているJ. ギリングムは、12世紀を前者が「野蛮人」とされてゆくひとつの転換期とし、またそうした観念の普及、つまり「ブリテン諸島の歴史の中でもっとも破壊的なイデオロギー転換のひとつ」に「少なくとも部分的な責任を負う」のが、ひろくよまれることになる(そして現在でも評価の高い)史書をものしたウィリアム・オヴ・マームズベリであった、と指摘する<sup>(15)</sup>。ウィリアムは古典の知識から、“barbari”ということばを、「異教徒」とする伝統的・キリスト教的な意味ではなく、「文明人」の反対語として利用することを学び、ケルト的周縁の人々に適用した——こうギリングムは考え、また彼らがそうされる大きな理由として、彼らの社会でいまだに奴隷が使われていたことを重視するのである<sup>(16)</sup>。ギリングムは、ウィリアム・オヴ・ニューバラとウィリアム・オヴ・マームズベリについて具体的に述べているわけではないが、前者を「野蛮人」視の典型例、後者をその12世紀における開祖的人物と見ていることからして、両者をひとつの流れのなかで理解しているように思われる。

さて、それではベータやウィリアム・オヴ・マームズベリが「ケルト的辺境」に生きる者たちをじっさいいかに見ていたのか、章を改めて具体的に検証してみたい。

### 4 ベータの場合

本章ではベータの *Historia Ecclesiastica gentis Anglorum* (『イングランド人の教会史』)<sup>(17)</sup> (731年完成)における「野蛮人」と「ケルト的辺境」の民について検討する。

[1] カエサルはブリテン島攻撃を描いたなかにも、「ブリトン人 “Brittani”」がテムズ川の底に杭を

打っておいたのを、「ローマ人たちに見つけられ避けられたので、野蛮人たちは軍団の襲撃に耐えられず森に隠れた… “Quod ubi a Romanis deprehensum ac uitatum est, barbari legionum non ferentes siluis sese obdidere…”」(p.22)とある。「ブリトン人」が「野蛮人 “barbari”」とされている。p.214にみられる “barbari” (ノーサンブリアのオズワルドが、カドワラ率いるブリトン人を打倒したのち、「野蛮人たち」を破る際に有力だったキリスト教を振興したいと考えた、という<sup>(18)</sup>)も同様であろう。

[2] ローマ軍がブリテン島を去る際にブリトン人たちになしたこととして、「彼らの船があり、またそこからの野蛮人の襲撃を恐れていた南の大洋の海岸に… 塔を配置した “in litore Oceani ad meridiem, quo naues eorum habebantur, quia et inde barbarorum inruptio timebatur, turres… conlocant…” (p.44)」と述べられている。ここでの「野蛮人」はこのときブリトン人への脅威となっていた「アイルランド人とピクト人 “Scotti Pictique”」のことである。p.46の、ブリトン人たちのコンスルあて書簡にあらわれる “barbari”<sup>(19)</sup>も同様である。p.224の “barbari” (復活祭の正しい算定法を知らなかったとされる)はアイルランド人、特にアイオナの人々をさしているようである。

[3] 「このころ教会とノーサンブリアの民の大殺戮があった、それをなした指導者の一人(マーシア王ベンダ)は異教徒であり、もう一方は異教徒より残酷な野蛮人だった… しかし実際カドワラは、キリスト教徒の名をもち信仰告白をしたが、精神や暮らしぶりは野蛮人であり、女性も罪のない子供も容赦しなかった… “Quo tempore maxima est facta strages in ecclesia uel gente Nordanhymbrorum, maxime quod unus ex ducibus, a quibus acta est, paganus, alter quia barbarus erat pagano saeuior… at uero Caedua, quamuis nomen et professionem haberet Christiani, adeo tamen erat animo ac moribus barbarus, ut ne sexui quidem muliebri uel innocuae paruulorum parceret aetati…” (p.202)。」グウィネズ王カドワラは、p.240では「ブリトン人たちの有害な王 “feralis… rex Brittonum”」とよばれている<sup>(20)</sup>。またここでは性別も年齢も無関係に殺戮する、という描写がみられることにも注意しておきたい。

さてこのように、ベータはブリトン人、ピクト人、またアイルランド人を確かに「野蛮人」とのべていた。但しベータがそう述べている箇所は決して多くはない<sup>(21)</sup>。さらにたとえばpp.426f.ではアイルランド人のことを「無害でイングランド人には常にたいへん友好的な民 “gentem innoxiam et nationi Anglorum semper amicissimam”」として、人々の助言をいれずに彼らを攻めたノーサンブリア王エグフリスがのちにピクト人に殺されたのはその報いである、と述べている。チャールズ・エドワーズはベータの描くアイルランド人像とブリトン人像のちがいを指摘し、ベータのブリトン人评价にはエスニックな反感や政治的対立関係に由来する面もあったかもしれないがそれは表にはあらわれていないことを述べ、ベータが野蛮さを感じるのは、理不尽な暴力の残忍性が示される場合や、ローマ教会の教えに反発したりまたそれを皮相的にしか受け入れない場合である、と結論している<sup>(22)</sup>。

## 5 ウィリアム・オヴ・マームズベリの場合

つづいて、HRAの約50年以上前の作品である、ウィリアム・オヴ・マームズベリの *Gesta Regum Anglorum* (『イングランド諸王の事績録』)をひもとくことにしよう<sup>(23)</sup>。

[1] デーン系のノーサンブリア王で「血統も精神も野蛮人 “gente et animo barbarus”」(p.212)のシトリックが没したのち<sup>(24)</sup>、エセルスタン王がスコットランド人の王コンスタンティンとカンブリア人の王オウェンに使いをやってシトリックの遺児のひきわたしを求めた際に、「野蛮人たちにはそれに文句を言う気はなかった “Nec fuit animus barbaris ut contra mutirent”」(p.214)と記

されている。ここで「野蛮人 “barbari”」とみなされているのは「スコットランド人 “Scotti”」と「カンブリア人 “Cumbri”」である。またp.726ではスコットランド王デイヴィッドについて、「少年時代からわれわれ（イングランド人）と親しくつきあったことで磨かれて、野蛮国スコットランドの錆をすべて洗いおとした “nostrorum conuictu et familiaritate limatus a puero, omnem rubiginem Scotticae barbariei deterserat”」とされている<sup>(25)</sup>。

[2] 「ウェイルズ人の王だった兄弟リースとグリフィスを策略で死においやり、かの野蛮な国全体を（イングランド）王の保護下にある土地という地位においた、ゴドウィンの子でウェスト・サクソン伯ハロルド（もエドワード王の家臣だった）“Haroldum Westsaxonum filium Goduini, qui duos fratres reges Walensium Ris et Griffinum sollertia sua in mortem egerit, omnemque illam barbariem ad statum prouintiae sub regis fide redegerit.” (p.350)。」人ではないが、ウェイルズ人の住む地が野蛮視されている。

[3] 十字軍行について述べた箇所より、「いまやこの愛は内陸にあるくにぐばかりでなく、たいへん遠くにある島々あるいは野蛮な民の中でキリストの名を聞いたものすべてを動かした。このときウェイルズ人は森での狩猟を、スコットランド人がノミとの親交を、デーン人が深酒を、ノルウェイ人が魚を食べるのをやめたのである “Nam non solum mediterraneas prouintias hic amor mouit, sed et omnes qui uel in penitissimis insulis uel in nationibus barbaris Christi nomen audierant. Tunc Walensis uenationem saltuum, tunc Scottus familiaritatem pulicum, tunc Danus continuationem potuum, tunc Noricus cruditatem reliquit piscium,” (p.606)。」ウェイルズ人、スコットランド人、デーン人、ノルウェイ人が「野蛮な民」とされている、とも読める文である。

以上、ウィリアム・オヴ・マームズベリの作品中で「ケルト的周縁」の人々が「野蛮人」視されている箇所をみてきた。確かにスコットランド人やウェイルズ人が野蛮視されることはあった。なおアイルランド人は野蛮とはいわれていないが、p.738では彼らより「イングランド人とフランス人 “Angli et Franci”」が「より洗練された暮らし方で “cultiori genere”」都市で商業に従事している、とされている。ただ一方で、ウィリアム・オヴ・ニューバラの場合とちがって、ほとんど彼らの名が出てくるたびに野蛮といわれるわけでもなかった<sup>(26)</sup>。さてギリングムが重視しているのは、ウィリアム・オヴ・マームズベリがそれまでの宗教的な「野蛮人」観念（すなわち「異教徒」をそう考える）ではなく、文化的・社会経済的な観念として「野蛮人」を考えた点、そしてそれをキリスト教徒である「ケルト的周縁」の民にも適用するというベダ以来見られなかったことにおこった点にあった<sup>(27)</sup>。筆者は現在このことについて疑念をさしはさむつもりはない。ただベダや（彼の作品を読んでいた）ウィリアム・オヴ・マームズベリと、はじめに見たように、「ケルト的周縁」の民のことを述べる際にはほとんど常にその野蛮さというウィリアム・オヴ・ニューバラの間には、いささかのへだたりがあるように思われる。また2人のウィリアムの関係を考える上で重要な点として、ウィリアム・オヴ・ニューバラがウィリアム・オヴ・マームズベリを読んでいたとは断言できないことがある。一方ウィリアム・オヴ・ニューバラは確かにベダの著作に親しんでいる。それではパートナーのいうように、ベダがウィリアム・オヴ・ニューバラの影響源と断言できるだろうか。その前にわれわれは彼のインスピレーションの源をさらに探求していく必要があるだろう。では次に、彼が直接の典拠としたことがわかっている数少ない著述家のひとり、ヘンリ・オヴ・ハンティンドンに着目しよう。

## 6 ヘンリ・オヴ・ハンティンドンの場合

「この、島々の中でもっともすぐれた島は、かつてアルビオン、それからブリタニア、そして今

イングランドと呼ばれており、北西に位置している “Hec autem insularum nobilissima cui quondam Albion nomen fuit, postea uero Britannia, nunc autem Anglia, inter septentrionem et occidentem sita est.” と作品の冒頭で「イングランド中心」的な見方をはっきりしめしているヘンリだが<sup>(28)</sup>、彼が「ケルト的辺境」の民に（あるいはそれに関連して）「野蛮人 “barbari”」ということばを用いているのは4箇所、いずれもベーダなどの先行する著述にのっとったところである<sup>(29)</sup>。

なおいささか注目に値する箇所として以下の3つをあげておく。

[1] ダンスタンがイングランド人になした予言中に、ノルマン人だけでなく「彼らをもっともつまらないと考えているスコットランド人 “(gens) Scotorum, quos uilissimos habebant”」の侵入もうけることがあった。グリーンウェイはこれを、ダンスタンの伝記には単に「外国人」とあるのをヘンリ自身が具体的に解釈した結果と指摘している。ヘンリおよびその同時代人たちのスコットランド人への見方があらわれた箇所だろう<sup>(30)</sup>。

[2] p.710では1138年のスコットランド人たちの蛮行（妊婦の腹を割いて胎児を出す、子供を投げたてて刺す、祭壇で聖職者を殺すなど）が縷々述べられている。またp.714ではそのようなスコットランド軍にたちむかうものたちをオークニー司教がはげましている中で、スコットランド軍は武装しておらず裸で、規律になれていないとされる。蛮行、裸、無規律、いずれもこの頃の著作に「野蛮人」の特徴としてことあげされる点である。蛮行はベーダの作品にもみられたが、裸や無規律は比較的新しい着目点かもしれない。またとくに蛮行や無規律という特徴はウィリアム・オヴ・ニューバラに影響を与えているかもしれない。そして次章であつかう史家たちはみなヘンリの作品を読んでいたかもしれない、とされる。

## 7 ヘクサム、リーヴォーの著作家たち

最後に、ウィリアム・オヴ・ニューバラと同じ北イングランドで著述をおこなったリチャド・オヴ・ヘクサム (Richard of Hexham)、エイルレッド・オヴ・リーヴォー (Ailred of Rievaulx)、そしてジョン・オヴ・ヘクサム (John of Hexham) の作品に注目したい。管見ではリチャドおよびジョンをウィリアムが利用したのではと述べているのはウォルシュとケネディのみ、エイルレッドの影響を示唆しているのはグランスデンのみである。そしてウォルシュらの示唆はリチャドとジョンが「1138年のスコットランド人の北イングランドにおける軍事的行動を詳細にまた苦々しく語っており、その調子をウィリアムが採用している」こと、またウィリアムによるヨーク大司教ウィリアムへの関心がジョンのテキストを読むことでかきたてられたらしいこと、の2つの理由に基づいていた<sup>(31)</sup>。しかしそもそもニューバラとリーヴォーは近くにあつて関係も密接だったこと<sup>(32)</sup>、ニューバラもヘクサムも同じアウグスティヌス会だったこと、エイルレッドやジョンがリチャドの作品を読んでいたらしいことなどを考えると、こうした作品群の関係はウォルシュらという以上に密であった可能性を持つだろう。

### (i) リチャド・オヴ・ヘクサムの場合

ここでは彼の作品 *De Gestis Regis Stephani et de Bello Standardii* (『ステイーヴン王の事績とスタンダードの戦いについて』)<sup>(33)</sup> を検討する。

[1] 1138年にスコットランド王軍が北イングランドを襲撃した際の描写のなかに、「ピクト人たち、そして他の多くの者たち… こうした獣のような者たちは姦通や近親相姦や他の冒流行為を何とも思わず、理性のない獣のようなやり方でこうしたじつに哀れな者たちを利用して、あきると、彼女らを自分の奴隷にしたり、もしくは他の野蛮人たちに売って雌牛を求めたのである “Picti at multi alii… illi bestiales homines, adulterium et incestum ac cetera scelera pro nichilo ducentes,

postquam more brutorum animalium illis miserrimis, abuti pertaesi sunt, eas vel sibi ancillas fecerunt, vel pro vaciis aliis barbaris vendiderunt.” (p.157)」とある。

「ピクト人」はここではギャロウェイの者たちをいう<sup>(34)</sup>。「野蛮人 “barbari”」には「ピクト人」自身、また以下の例などからみて、スコットランド王のもとにあった他の人々も含まれるかもしれない。性的な乱れの指摘はのちのジェラード・オヴ・ウェイルズをも想起させ、また奴隷の問題はすでに見たように、ギリングラムが当時のイングランド社会との相違点として着目・強調するところであった<sup>(35)</sup>。

[2] p.160では、こうしたスコットランド王軍に対してヨーク大司教及び北イングランドの諸侯が立ち上がったという記事の中で、「怠惰から、極悪の野蛮人によっていつか一同がほろぼされることにならないよう “ne a pessima barbarie per ignariam se omnes una die prosterni sinerent”」大司教が諸侯に忠誠心を想起させ彼らをまとめた、とある。スコットランド王軍自身が「野蛮人 “barbaries”」といわれている。またp.163ではスコットランド王軍の陣立てについて「戦の前線にはピクト人、中央には王と騎士たち、また王の配下のイングランド人がおり、他の野蛮人たちはぐるりと彼らをかこみ、どよめきをあげていた “In fronte belli erant Picti, in medio rex cum militibus et Anglis suis : cetera barbaries undique circumfusa fremebat”」とある。さらにpp. 164f.では「すなわちイングランド人、スコットランド人、ピクト人、他の野蛮人たちは、たまたま互いに出会うとどこでも、どちらが強力であろうと強い方が相手を殺したり、傷つけたり、あるいは少なくともものを奪ったりした、そしてこのように、神の正しい裁きによって、そともの同様仲間からも抑圧されたのである “Namque Angli et Scotti, et Picti et ceteri barbari, ubicumque casu sese inveniebant, quicumque praevalebant alios mutuo vel trucidabant, vel vulnerabant, vel saltem spoliabant, et ita justo Dei iudicio aequae a suis sicut ab alienis opprimebantur.”」とされ、やはりデイヴィッド王軍の複雑な構成<sup>(36)</sup>、それが野蛮人とされること、またここではその規律のなさもはっきり指摘されている。

[3] こうした中でスコットランド王軍の残忍さはこれまであげた以外にもあちこちで述べられている。ここでは特に、pp.151f., 156, 171 で「性も年齢も」かまわず殺す、とあることに注目しておこう<sup>(37)</sup>。

#### (ii) エイルレッド・オヴ・リーヴォーの場合

つづいて、リチャードの記述などに基づきエイルレッドが1138年のスタンダードの戦いについて述べた作品を検討する<sup>(38)</sup>。

[1] p.182 では、ヨーク大司教がその管区に触れを出し、「野蛮人に対抗してキリストの教会を守るため “ecclesiam Christi contra barbaros defensuri”」、戦闘可能な者に、司祭・十字架・旗・聖遺物とともに集まるようよびかけた、とある。デイヴィッド王の軍勢が「野蛮人」とされている。エイルレッドの記述のなかで “barbari” ということが出てくるのはこの1カ所のみである。なおp.188ではウォールタ・エスベックのことばのなかで、スコットランド人・ギャロウェイ人が「獣 “bestiae”」とされている。

[2] p.186ではイングランド軍へのウォールタ・エスベックのことばのなかで、「とるに足らない、半分尻をだしたスコットランド人 “vilis Scottus seminudis natibus”」という表現がみられる。またp.190ではギャロウェイ人を「武装していない “inermes”」としている。

[3] p.187では、スコットランド軍が相手の年齢・性別などにかまわず残虐に扱う、という描写がある<sup>(39)</sup>。

#### (iii) ジョン・オヴ・ヘクサムの場合

最後に、ジョン・オヴ・ヘクサムが、おそらくヘンリ2世治世にシメオン・オヴ・ダラム

(Symeon of Durham) の *Historia Regum* をうけ、リチャドの作品などに基づきつつ書きついで作品を検討したい<sup>(40)</sup>。

[1] 1138年、ノーサンバランドに侵攻したデイヴィッド王軍の記述で、「その野蛮人たちは男女問わず孤児にも、老人にも弱者にも同情しなかった。性も年齢も、地位も境遇も職業も容赦しなかった。彼らは妊婦を胎児と斬り刻んだ “Non miserta est barbaries illa pupillo aut orphano, seni aut pauperi. Non pepercit sexui, aetati, aut ordini, conditioni cujusquam vel professioni. Praegnantes cum parvulis disseuerunt” (p.290)」とあり、この軍勢が「野蛮人 “barbaries”」とされている。年齢や性別にかかわらず、また妊婦らをも容赦しないと述べられ、これにつづいては女たちが奴隷としてつれていかれることが指摘される。

[2] スコットランド王デイヴィッドについて、彼が「熟慮と勇敢なところで彼の野蛮な民の粗暴さを賢く和らげたことは確かに称賛に値した “Praedicabile quidem in eo, quod in spiritu consilii et fortitudinis barbarae gentis suae feritatem sapienter moderatus est.” (p.330)」とされ、「彼の民 “sua gens”」が「野蛮」とよばれている。ただし具体的な民族名と結びつけられてはいない。

[3] p.294では、スコットランド王軍の第一線に位置したのが、「裸でほとんど武装していない “nudi…et…inermes”」「スコットランド人 “Scotti”」であったとされている<sup>(41)</sup>。なおこのページなどでジョンはスコットランド王軍を再三「スコットランド人とピクト人 “Scotti et Picti”」と述べていることにも注意しておきたい。さらにp.298では彼らがやはり教会や女子供、老人を襲う存在だったことが書かれている<sup>(42)</sup>。

## 8 さいごに

以上、「ケルト的周縁」の民を「野蛮人」とする見方について、ウィリアム・オヴ・ニューバラの年代記を皮切りに、彼の記述、ひいてはその精神世界の構築に影響があったと考えられる作品の一部について検討をおこなった。ウィリアムは、先行する作品を利用する場合でもかなりそれを咀嚼して自らのことばで語るため、彼の読書体験をたどることは比較的難しいとされるが、これまでの検討から、少なくとも「野蛮人」視という点に関してみると、ベータもさることながら、リーヴォーやヘクサムの史家たちも大きくウィリアム・オヴ・ニューバラに影響しているのではないだろうか。それは単に「野蛮人」ということばを用いるかどうかという点にとどまらない。たとえば「年齢も性もかまわない」というイメージや「規律がない」といったイメージの点についてもそうだった<sup>(43)</sup>。第3章との関係でいえば、パートナーの指摘のようにベータはウィリアム・オヴ・ニューバラのひとつのルーツではあるがいささか遠く、またギリングムの説については、まさしく彼が留保するように、ウィリアム・オヴ・マームズベリの「野蛮人」視普及への責任は「部分的」であるといえるだろう。

一方でリーヴォーやヘクサムの史家とウィリアムの相違点もたしかに存在する。リチャドはスコットランド王の軍や、ひいては王国がひじょうに多種の民からなることを指摘していた。またごく厳密に解釈すれば、彼のいう「野蛮人」はピクト人やスコットランド人のみでなく、「イングランド人」や「フランス人」さえふくむものであった。しかしリチャドよりあとの世代のエイルレッドやジョンは、「野蛮」なスコットランド軍についてより単純に（たとえば「スコットランド人とピクト人」として）とらえており、そしてウィリアムの記述では「スコットランド人」が野蛮、と描かれるに至るのである。「ネイションのシャッターがおりていく」<sup>(44)</sup> 過程のひとつをわれわれはここにはっきり見ることができるように思われる<sup>(45)</sup>。またもっとも明白な違いは、リーヴォーやヘクサムの史家たちにアイルランド人やウェイルズ人への言及がないことである。ウィリアムがウェイルズ人を野蛮視することには（パートナーのいうように）彼らをブリトン人の末裔であるとする認識

が一役買っていたであろうこと、またアイルランド人に対して向けるまなざしについては、筆者がかつてあげた状況証拠を原因としてあげるに今はとどめたい<sup>(46)</sup>。

さて本稿はいつてみればひとつの「試し掘り」であり、残された課題が多いことはいうまでもない。まず今回はウィリアム・オヴ・ニューバラを出発点として、先行研究者の導きによりつつ、彼の大きな影響源と思われる者たちについて検討したのだったが、ウィリアム自身、また今回とりあげた他の著述家についてもそれぞれ、さらなる思想的なルーツをたどっていける可能性がある。また、ウィリアムと、彼の同時代人だったジェラード・オヴ・ウェイルズとの共通性がどこから現れるのか。さらに、やはり同時代人であっても、今回検討した「野蛮人」視と縁遠い者たち<sup>(47)</sup>との違いは何に起因するのか。最後に、今回は文字化された情報にもっぱら考察の焦点をしばったのだが、たとえばギリンガムが奴隷の有無を強調するように、実際の社会的現実との関連もいっそう考えねばなるまい<sup>(48)</sup>。それぞれ今後の課題としたい。

#### 註

- (1) 「ジェラード・オヴ・ウェイルズのウェイルズ、そしてアイルランド」、樺山紘一編『西洋中世像の革新』、刀水書房、1995所載。またギラルドゥス・カンブレンシス著、拙訳『アイルランド地誌』青土社、1996。
- (2) その成果のごく一部としてたとえば R. R. Davies, *Domination and Conquest: The Experience of Ireland, Scotland and Wales 1100-1300*, Cambridge, 1990; R. Frame, *The Political Development of the British Isles 1100-1400*, Oxford, 1995 (Clarendon Paperback edition); (eds.) A. Grant and K. Stringer, *Uniting the Kingdom?: The Making of British History*, London, 1995. をあげておく。最後の書物は中世ばかりでなく近現代をもその対象としている。そもそも「ブリティッシュ・ヒストリー」という概念そのものが近代史家の J. G. A. ポコック (Pocock) によって提唱されたものだった (*Ibid.*, p.5.)。
- (3) たとえば R.R. デイヴィスは、ブリティッシュ諸島内を中心とした比較史の可能性がひらけること (王権や諸侯領のあり方などについて)、また、イングランドやスコットランド、ウェイルズ、アイルランドといった「ネイション」にとらわれずに活動した者たちの行動を理解する上で「ブリティッシュ諸島」という枠組みが有効であることなどをあげている。R.R. Davies, "In Praise of British History", in (ed.) Idem, *The British Isles, 1100-1500*, Edinburgh, 1988.
- (4) Idem, *Domination and Conquest*, p.21.
- (5) Idem, "The Peoples of Britain and Ireland 1100-1400, 1. Identities", *Transactions of the Royal Historical Society*, Ser. 6, 1994. ギリンガムについては後述。
- (6) *Historia Rerum Anglicarum* の刊本は (ed) R. Howlett, *Chronicles of the Reigns of Stephen, Henry II., and Richard I.*, vols. 1 & 2, London, 1884-9 に収められたものを参照した (以下 HRA と略記する)。HRA は全部で 5 書からなるが、第 1 書は対訳付きで出されてもいる。(eds. & trs.) P. G. Walsh and M. J. Kennedy, *The History of English Affairs*, Book 1, Warminster, 1988. 但しラテン語のテキストそのものは一部の句読法を除いて上記 Howlett の版と同じである。
- (7) ウィリアムの生涯などについては註(6)であげた書物の "Preface" および "Introduction"、また A. Gransden, *Historical Writing in England c. 550 to c. 1307*, London, 1974, pp.263-8 を参照。
- (8) p.111 でも同様に "Daci" と "Norrenses" が "barbarae nationes" とされている。なお p.368 ではデンマーク王への家臣の進言の中で、「ウエンド人 "Wandali"」が野蛮人といわれている。
- (9) "immanitas" ということばはウィリアムの史料のひとつ、ヘンリー・オヴ・ハンティンドン

(Henry of Huntingdon) の年代記でも、同じスコットランド人たちの行為を描く際につかわれていた。*Historia Anglorum*, (ed. & tr.) D. Greenway, Oxford, 1996, p.710. なおこの書物は以下 HA と略記する。

(10) これは p.171 にもあらわれる。

(11) 但したとえば p.184 では「スコットランド人」と明言しているわけではないが、その前のページからみてこのように解釈できよう。あるいはフランドル人が入っていることもここで意識されているだろうか？ また pp.186f. の例は特にギャロウェイ人をいうのかもしれない。

(12) “barbarus” ではないが、p.145 でもウェイルズ人が「乱暴で野蛮な民 “gens effrenis et effera”」とされている。一方 p.195 には、ヘンリ 2 世軍のウェイルズ人部隊による大陸での活動が記されているが、ここには「野蛮」に類する表現はみられない。なお、前出の「ブリトン人」との関係については、この「ブリトン人」の末裔が今ではウェイルズ人と呼ばれている、という記述がある (p.13)。

(13) N. F. Partner, *Serious Entertainments*, Chicago and London, 1977, part II.

(14) *Ibid.*, p.64. ベーダを念頭に置いている箇所とは、ウィリアムが、1166年のアルビジオア派の事件以前にイングランドで異端を助長したのはブリトン人のみだったと述べているところ (HRA, p.132) であるという。一方パートナーは、ウィリアムの偏見を真の外国人嫌いの感情ではなく、単なる当時の因襲——まだナショナリストではないが、人間のある特質をなお流動的なネイションの境界の中に位置づけることを受け入れる、いや増しつつあるそれ——と述べている (Partner, p.95)。

(15) J. Gillingham, “The Context and Purposes of Geoffrey of Monmouth’s *History of the Kings of Britain*”, *Anglo-Norman Studies*, XIII, 1991, especially pp.106-8; Idem, “Conquering the Barbarians: War and Chivalry in Twelfth-Century Britain”, *Haskins Society Journal* 4, 1993; Idem, “The Beginnings of English Imperialism”, *Journal of Historical Sociology*, vol.5, no. 4, 1992, especially pp.397f.; Idem, “Foundations of a Disunited Kingdom”, in *Uniting the Kingdom?*, especially pp.59f.. 本文中の引用は *Ibid.*, p.59 による。

(16) なお前近代のヨーロッパにおける「野蛮人」像の変遷、また特にブリテン諸島の「野蛮人」に関する古典的論文として W. R. Jones, “The Image of the Barbarian in Medieval Europe”, *Comparative Studies in Society and History*, xiii, 1971; Idem, “England against the Celtic Fringe: A Study in Cultural Stereotypes”, *Journal of World History*, xiii, 1971 がある。

(17) (eds.) B. Colgrave and R. A. B. Mynors, Oxford, 1969. 以後本書は HE と略記する。

(18) なおヘンリ・オヴ・ハンティンドンがベーダに基づきこのカドワラのことを述べている中で、“barbari” ということばは採用されていない。HA, p.184.

(19) J. M. Wallace-Hadrill, *Bede’s Ecclesiastical History of the English People: A Historical Commentary*, Oxford, 1988, p.19 も参照。

(20) 但しカドワラが悪しく描かれているのは、単に彼がブリトン人でノーサンブリア人の敵だったからではなく、これは HE の構想自体の中で読み解かれるべき問題である、とされる。T. M. Charles-Edwards, “Bede, the Irish and the Britons”, *Celtica*, 15, 1983, pp.45f.; Wallace-Hadrill, *op. cit.*, p.84. なおヘンリ・オヴ・ハンティンドンはベーダに基づきつつカドワラのことを述べている中で、“barbarus” ということばを採用していない。HA, p. 184.

(21) ちなみに索引によれば、HE でブリトン人があらわれるのは 30 ページ、ピクト人が 18 ページ、アイルランド人 (“Hiberni”) が 28 ページ、“Scotti” が 26 ページである。

(22) Charles-Edwards, especially pp.42f. and 51.

- (23) (eds. & trs.) R. A. B. Mynors, R. M. Thomson and M. Winterbottom, Oxford, 1998. 本書は以下GRと略記する。
- (24)p.228では彼の遺児のひとりアンラフが「野蛮な心 “barbaricus animus”」の持ち主とされている。ここでは彼がキリスト教への改宗を表明したが結局それをうけいれなかったことが述べられているので、「反キリスト教的」という意味で「野蛮な」ということばが用いられているとも考えられる。
- (25)こうした、イングランド人あるいはフランス人の文明的先進性を指摘した箇所は後述のようにp.738にも（ここではアイルランド（人）との対比において）みられる。ただp.78では（おそらくベダをうけて）アイルランド人を罪なき民としている。
- (26)ちなみに索引によれば、GRでスコットランド（人）があらわれるのは全部で29章、アイルランド（人）は11章、ウェイルズ（人）は15章ある。
- (27)たとえばGillingham, “The Beginings of English Imperialism”, p.398を参照。
- (28)HA, p. 12. これはベダのHE, p.14に基づいているが、「今イングランドと」ということばはヘンリが付け加えたものである。またブリテン島が現在イングランドと呼ばれているという言明はウィリアム・オヴ・ニューバラにもみられる（HRA, pp.107, 132）。なおHAは1120年代から1150年代にかけて執筆され、その間6種類の版が生み出された。
- (29)pp.34, 38, 72, 98. それぞれブリトン人、ローマに服属した民（ブリトン人を含むかもしれない）、アイルランド人とピクト人、アングロ・サクソン人をいう。
- (30)p.340 and n. 3.
- (31)Walsh and Kennedy, pp.17f.. なおグランズデンは註で示唆をのべるにとどまっている。Gransden, p.264, n. 134.
- (32)ウィリアムの作品はそもそもリーヴォー修道院長アーノルド（エイレルドの弟子）の要望をうけて書かれ、彼に捧げられている。
- (33)in, (ed.) R. Howlett, *Chronicles of the Reigns of Stephen, Henry II., and Richard I.*, vol. 3, 1886. これは話題とされている事件のすぐあとに書かれたものと考えられている。Gransden, p.216.
- (34)p.152ではデイヴィッド王の軍が「ノルマン人、ゲルマン人、イングランド人、ノーサンブリア人、カンブリア人、テヴィオットデイルおよびロウジアンの人たち、ピクト人——ふつうギャロウェイ人といわれる——、スコットランド人から “de Normannis, Germanis, Anglis, de Northymbranis et Cumbris, de Teswetadala et Lodonea, de Pictis, qui vulgo Galleweianses dicuntur, et Scottis”」になっていたとされ、彼らが命令でなく掠奪欲などで集まったといわれている。
- (35)『アイルランド地誌』221ページ。またリチャドはp.156でも、彼らがいつも掠奪および女奴隷狩をすると観察している。
- (36)註(34)も参照。またあとでみるように、ジョン・オヴ・ヘクサムはこの王軍を「スコットランド人およびピクト人」とのべることがしばしばであることに注意したい。
- (37)“utriusque sexus cujusque aetatis et conditionis homines passim trucidavit” (pp.151f.), “Igitur nulli gradui, nulli aetati, nulli sexui, nulli conditioni parcerens” (p.156), “et quod parvulis et foemineo sexui et ex infirmitate et aetate debilibus parcerent” (p.171).
- (38)Ailred of Rievaulx, *Relatio de Standardo*, in (ed.) Howlett, *Chronicles of Stephen etc*, vol. 3, 1886. おそらく1155~1157年の間の作品である。Gransden, p.213.
- (39)“Nulli aetati, nulli ordini, nulli omnino sexui pepercerunt” これに続いて人妻を犯し、子

供を宙にあげ槍で刺し、妊婦の腹を割き、人の肉を食べ血をすすり、という描写になる。p.194にはロバート・ド・ブルースのことばのなかで、こうした幼児や妊婦らへの暴行についてふれられている。

(40) John of Hexham, *Continuata*, in (ed.) T. Arnold, *Symeonis Monachi Opera Omnia*, vol. 2, 1885.

(41) エイルレッドの [2] で挙げた例との違いに注意。グランスデンは、エイルレッドがイングランド人とスコットランド人の平和協調をよしとしたため、主な戦いの担い手をギャロウエイ人とフランス人 (“Galli”) にした、と指摘している (Gransden, pp.214f.)。一方アンダーソンはエイルレッドの記述に付した文で、「ハイランドのスコットランド人は今なおロウランド人を『ガリア人』と呼ぶ」と述べている。A. O. Anderson, *Scottish Annals from English Chroniclers from A. D. 500 to 1286*, reprint edition, Stamford, 1991, p.180, n. 4. アンダーソンはまた、ジョンもヘンリ・オヴ・ハンティンドンも「ギャロウエイ人」という名称を避けている、と述べる (*Ibid.*, p.203, n. 1.)。確かにヘンリの年代記に出てくるのは「ロウジアン」の民と「スコットランド人」であった。

(42) “femineo sexui vel pueris vel senibus caedem inferre ulterius praesumeret.” 教皇特使が彼らにそれをやめることを同意させた、という文脈である。

(43) ただし「年齢も性も」のイメージは先に見たように、1カ所ベータに描かれているので、少なくとも究極的には彼にさかのぼりうる可能性がある。

(44) Davies, “In Praise of British History”, p.17.

(45) ただウィリアムにも第2章の [6] であげたように民族観念の複雑さをうかがわせるところがあった。シャッターは「おり」つつある状態である。註(14)のパートナーの指摘も参照。さてかつて筆者は年代記ではなく、証書にあらわれる特定の民の名をあげての挨拶 (“racial address”) の、場所・年代による変化について検討したことがあり、そこでは政治的な安定度と、人々の「同化」の進展度がそれに関係していることを推論したのであった (『「racial address」考』、『海南史学』34、1996) が、こうした「民の名」の呼び方(呼ばれ方)は、まさにアイデンティティや権力の問題にむすびついており、今後も検討対象にしていきたいと考えている。

(46) 「ジェラード・オヴ・ウェイルズの…」、特に88~9ページ。ただしウィリアムとリーヴォー(シトー会)との関係、そしてクレルヴォのベルナルドゥスとのつながりを詰めて考える必要がある。

(47) たとえばロジャ・オヴ・ハウデン (Roger of Howden)。J. Gillingham, “The Travels of Roger of Howden and his Views of the Irish, Scots and Welsh.”, *Anglo-Norman Studies*, XX, 1998参照。

(48) たとえばスコットランド王デイヴィッドやウィリアムによる北イングランド侵攻はウィリアムらこの地の史家たちに大きな影響を与えているだろうことはいうをまたない。

